

# ウォークラリーレポート

富永ゼミ 10N1104 長谷川裕馬

私のゼミでは上野・本郷周辺でウォークラリーを行った。

まず最初に東京文化会館へ行った。中へと入ると、コンクリートと黒の天井と赤の壁や天井の色使いがとても斬新であるが、どこか日本らしい色の使い方でとても高級感があるように感じた。原色の赤色を大胆に使ってあるが、周りから浮いている感じがなく、色の使い方に衝撃を受けた。

また床は、三色ほどの三角形が不規則に並んでいて、落ち葉が散らばっているようにデザインしてあり面白いと思った。

落ち葉の絵を描くのではなくて三角形を使って抽象的に表すというのは室内の雰囲気を崩さなくきれいであった。

天井の照明も不規則に設置されていて星空のように感じられた。

床のタイルや天井の照明も普通なら規則的にきれいに並べてしまうところをあえて不規則にしてしまうという、とても簡単なアイデアではあるが、発想しにくいデザインを取り入れているところから、今現在あるものの形をすこし変えれば、優れたデザインのものができるということが勉強になった。

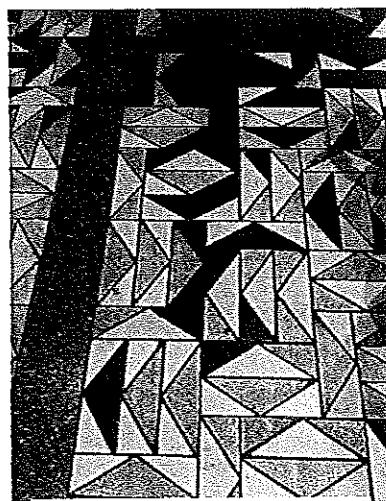
次に国立西洋美術館へと行った。

コルビュジエが設計した国内唯一の作品である。日本の瓦の石を張り付けたパネルを外壁として使用しており、日本を意識したデザインになっているのだなと思った。

側面にあるコンクリートの外階段の手すりに



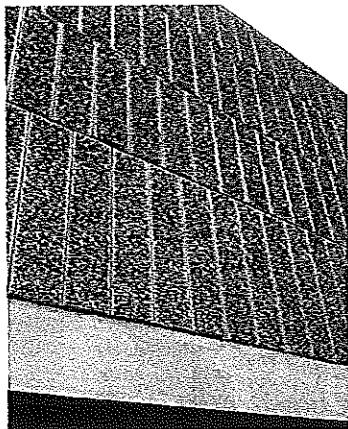
東京文化会館 内部写真



東京文化会館 床写真

傾斜がつけられているのは、雨水がコンクリートの中にしみ込み、コンクリートの中の鉄筋が錆びて退化することを防ぐためだというの、細かいこと

であるが、とても勉強になった。



石で造られたパネルの外壁



傾斜のついた手すり

次に東京国立博物館内の法隆寺宝物殿へ行った。

建物が見えてくると、一面がガラス張りとなっている大きな建物が目につき、建物の前には水がはってあり、水の上の石畳を歩いていき、建物の入り口へと続いていた。畠一畠分の大きさの石畳が敷いてあった。

すぐに入口へとつながっているのではなく  
水面上の石畳の上を歩いていくことによって  
心が落ち着き、ゆったりとした気持ちで  
中の展示物を見ることができた。

日本らしい「おもてなしの心」というものを感じた。

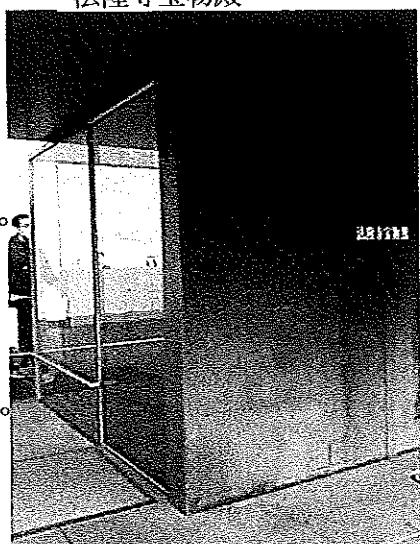
また入り口も石畳を歩いて行った正面から  
入るのではなく、横から入るようになって  
いるのは、とても気が利いているなと感じた。

展示室内は、暗くなっていて、展示物の貴重さや  
神聖さがより伝わってきた。入り口ロビー側の  
全面ガラス張りになっている部分と、展示室内的  
暗さの対比がはっきりとしていて、見る人にも  
気持ちの切り替えがしやすくなっているなと感じた。

今回のウォークラリーでは、一つの建物から  
得られることがたくさんあった。自分でも  
いろいろな建築を見て回りもっと勉強したいと思う。



法隆寺宝物殿



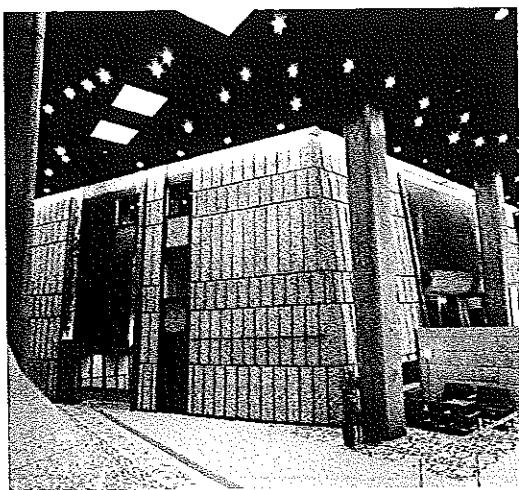
法隆寺宝物殿 入り口

# WALK RAIL

2010. 05. 29

富永セミ 10N 1105 火星手帳

## ～東京文化館～



赤と黒の壁は、とても雰囲気が出ており、照明によく合ってておしゃれ。床には風がふいた時の落ち葉の模様が書いてあります。今まで建物を竹林でいうのがなかった。今回はウォークラリーだったので時間がなく、くまなく見ることができなかたので、機会があれば是非、中まで入ってココガートをきかれて思う。

## ～国立西洋美術館～

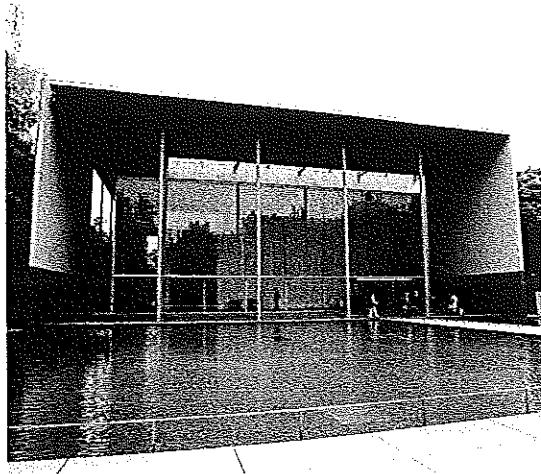


これは、ル・コルビュジエが設計した建築で、私が実は、施設の隣に一度奥に迷ひでて、それ以外の人の隣をしていないと解ったときでした。

私が、手すりが廊のことを考慮して斜面に付けており、長持とする建物をつくらうとしたときに張りをつける機会はこれが大切なので手間はかかります。

以前は、駅舎として、外構も見ていました。

## ～法隆寺宝物殿～



この建築物を最初に見た時、正直鳥肌が立った。

外景があまりにもさうして身がまるで引きしまるような感じがした。

今は、とてもどうしておんな細い柱で建物が立っているかよくわからなくなつた。この建物の構造をもとで気が強くなり、かなり理解したいと思う。

そして、この建物を見て「模型」などをびんでいた。

## ～東京大学～



まず、東大のキャラバスの広さに感動した。建築物も非常に奥味深いものはありて特に情報学環・福武ホールが印象的だ。

建物の上に重々複雑な構造をもつものが多い印象だが、あれと周辺のこと考慮している感がある。

ただ、あまり重視しない感じは、太一はあまり気にかけてない。

# WALK RALLY

10N1106 濱野 みのり (富永ゼミ)

今回のウォークラリーでは、上野から本郷まで、たくさんの建築物を見ながら歩きました。

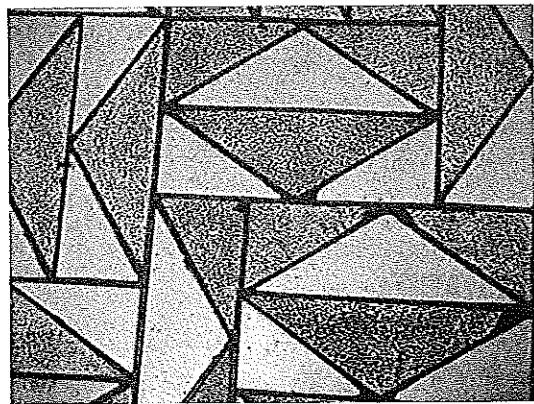
これまで、こんなにさまざまな建築物を見て歩いたことはありませんでした。

実際に色々な建築物を見ながら歩いてみて、本当にたくさん得るものがあったし、感じる空気がありました。

富永教授やTAの方々の説明を聞くことで、楽しみながらたくさんの新しいことを学ぶことができ、とても贅沢な時間を過ごせました。

ここからは、実際にウォークラリーで見学した個々の建物の感想について述べたいと思います。

<東京文化会館>



まず、東京文化会館に入ったときに、華やかな空気を感じました。

1961年に建てられたものにもかかわらず、その建物からは少しも古い感じはせず、とてもモダンでおしゃれな雰囲気に包まれていました。

左の写真のように、照明は不規則に取り付けられていて、星空をイメージして作られていることを学びました。また、右の写真のように、床は落ち葉をイメージしていて、一枚一枚タイルを職人が張って作られたことを知りました。

屋内にいながら、自然をイメージしたデザインによって、その建物の独特的な雰囲気がでているように感じました。

今回はロビーと外観だけの見学だったので、今度はホールにも入ってみて、劇場建築について学んでみたいです。

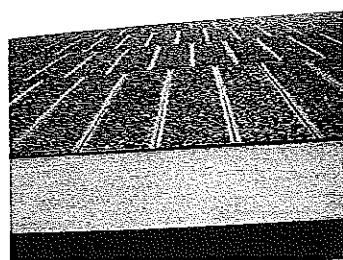
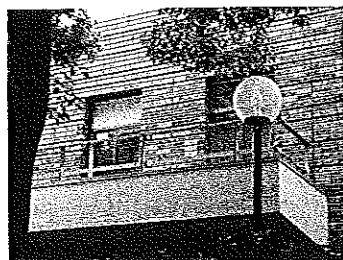
#### <国立西洋美術館>



今回は、外観だけの見学だったので、内部はわかりませんが、外から見た感じでは、とてもかっちりとした硬質な印象を受けました。

入るのに少し緊張するような場所のように思いました。

建物の右側には彫刻が立ち並び、美術館だということが一目でわかります。



左の写真は、新館の外壁です。

特徴的な壁の緑色は、周りの縁に溶け込むようにその色にされていて、手すりは屋外にあるため、さびて安定するような鉄が使われていることを知りました。

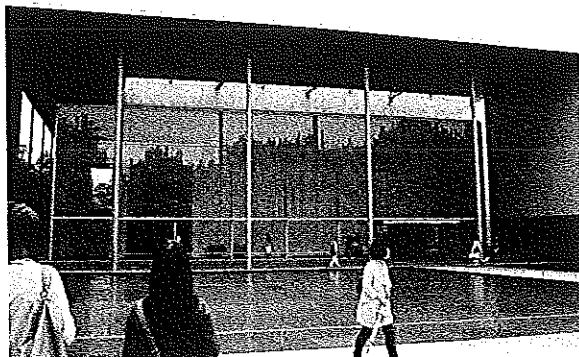
また、右の写真は本館左側の手すりの写真です。

ななめにカットされているのは、雨水が中に入りて中の鉄がさび、コンクリートが崩壊するのを防ぐために、雨水がながれるような工夫がなされていることを学びました。

このように、外的条件に合わせて、建物が長持ちするための様々な小さな工夫をするとの大切さを知りました。

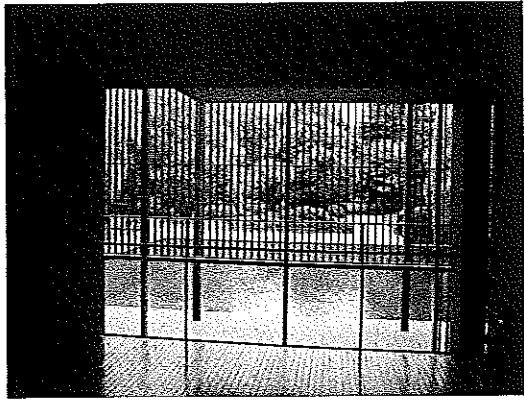
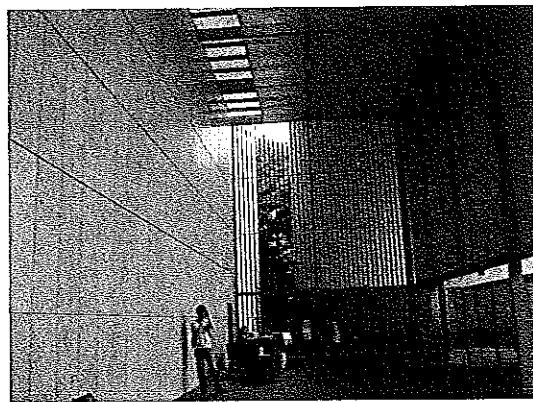
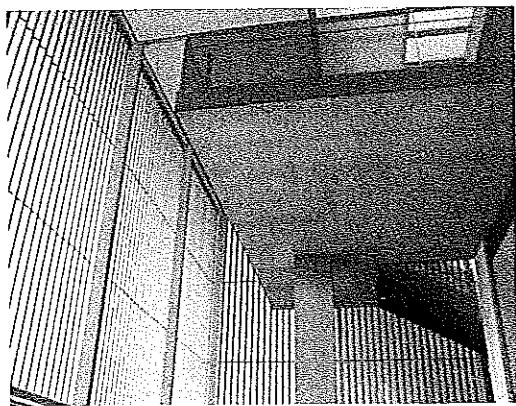
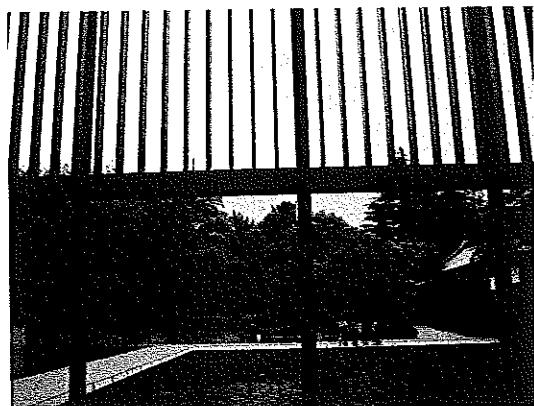
今まででは、そんなことに気がついていなかったので、自分も建築を考える際には、ただ形を追求するだけでなく、どのような様々なことを考えていかなければならないなど思いました。

## <法隆寺宝物殿>



建物に入る前の空間には、水が張ってあります。そのことで、精神を落ち着かせるような効果があると知りました。

事実、その空間には静観な雰囲気が漂っており、意識しなくても静かな気持ちになりました。ガラスと鉄という無機質な素材でつくられたその建物からは、少し神秘的な印象も受けました。



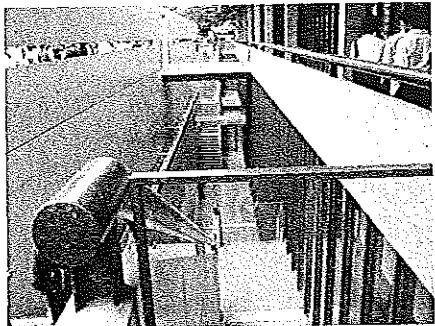
玄関口は、強い風の日でも風が入ってこないような工夫がなされており、ここにも用途に合わせた工夫がなされていることを感じました。

内部にも、やはり静観な空気が広がっていました。

写真にはありませんが、内部の展示室は、少し薄暗く、展示品の下にとても小さなライトを設置してスポットライトをあて、展示品が目立つようになっていましたり、展示品の紹介文をあえて正面ではなく横につけることによって、展示品そのものの良さを損なわな

いようにしていたりと、展示品を見せるための工夫がなされていました。美術館という特殊な建築に対して、このようにじっくりと見たことはなかったので、美術館建築の展示品の見せ方や、特殊な場のつくり方について学ぶいい機会になりました。ほかの美術館の見学にも、ぜひ行ってみたいなと思いました。

#### <東京大学>



東京大学では、時間があまりなかったこともあります。じっくりとみている余裕はなかったのですが、それでも東大全体が持つ伝統ある空気が感じられました。安田講堂をはじめとするゴシック様式の建物からは、一種の荘厳な雰囲気を感じました。それはまるで、東京大学の長い伝統が染みついているようでした。

また、東京大学にある最近になって建てられた様々な有名建築も、常に新しいものを発信する東京大学の空気になじんでおり、古いものと新しいものが同居する、おもしろい空間だなと感じました。

今回はあまり時間がなかったので、今度またじっくり見てみたいです。

このほかにも、歩く途中で様々な建築を見ましたが、どれも自分の感性に磨きがかかるようなものでした。

これからも、自分の足で建築を見に行き、その場の空気を感じることの大切さを忘れずに、いろいろな建築を見てていきたいと思いました。

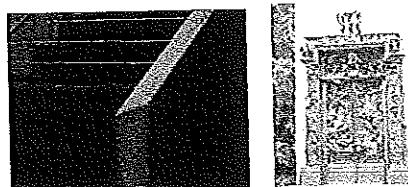
# 富永セミ

## ウォークラリーをしての感想

10n1107 濱萩翔平

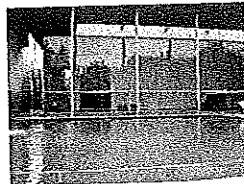
僕たちは、まず上野にある東京文化会館に行きました。ここは、音楽ホールというだけあり、何か威厳のある雰囲気を醸し出している建物でした。今度機会があったら、このホールでのコンサートを聴いてみたいです。

次に、世界遺産の登録候補にもなっている、ル・コルビジェが設計した国立西洋美術館に行きました。この建物を見てまず気になったのは、壁に小石が無数に張り付けてあり、面白いデザインだなと思いました。そして、この建物の周りには、ロダンの考える人や、地獄の門のような有名な彫刻が点在していました。横にある階段は左向きに少し傾けることによって、雨水が左側に流れ出し、お客様から見ると階段が雨によってあまり酸化しないように見えることに驚きました。コルビジェのちょっととした心遣いに感銘を受けました。



その隣にある、ル・コルビジェの弟子である前川國男が設計した新館は、壁が周りの木々にうまく溶け込めるように、少し緑がかったタイルが貼られており、確かになんなく周りに溶け込めてるなと思いました。

次に、東京国立博物館に行きました。ここには、様々なギャラリーがありますが今回は、法隆寺宝物館に行きました。この建物の前には、何かを思わせるような壮大な水の空間がありました。まるで心の準備をしてからこの建物にはいりなさいというメッセージのようです。実際に入ってみると、法隆寺が皇室に献納した仏像などの貴重なものが300点近く展示しており、どれも歴史を感じることができ、素晴らしかったです。



次に、東京大学に行きました。僕たちが行ったときちょうど五月祭をやっており、学生たちが知恵の限りを絞りさまざまなお店を出してました。法政の学園祭もこのくらい盛り上がるのかなと少し期待しました。あと、初めて赤門というものを見ました。この門は、なんとなくお寺の前にある門のようだなと思いました。

最後に、富永先生の研究室にお邪魔しました。ここには、富永先生が設計した(している?)ある病院の模型もありました。僕も、最終的にあのくらいきれいに模型を作れるようになれたらしいなと思います。

そして法政の田町校舎に戻り、今日の反省会をしました。

僕は、このウォークラリーを通じて様々なことを学べたような気がします。また今度は、暇な休日などに先生に連れられてではなく、法政でできた友人たちと自主的に東京の街を歩き回りたいと思います。

5/29

富永ゼミウォークラリーレポート



10N1108 林 沙希子

# 『東京文化会館』

## memo

東京都が開都500年の記念事業として自らであるル・コレビジエの「国立西洋美術館」に向む合うように建言された本格的なオペラ劇場である。

- 設計士：前川國男建築設計事務所
- 竣工：1961年

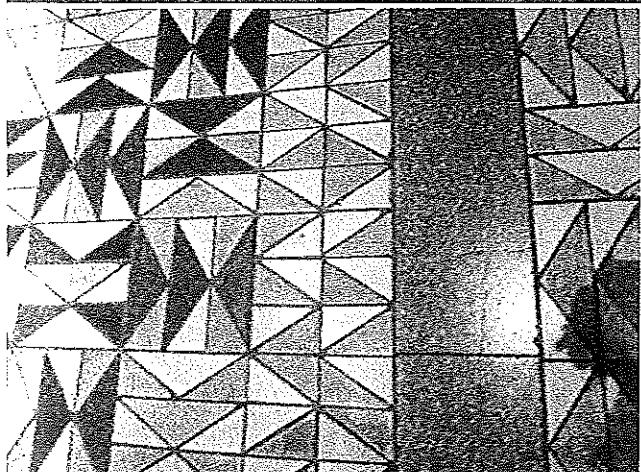
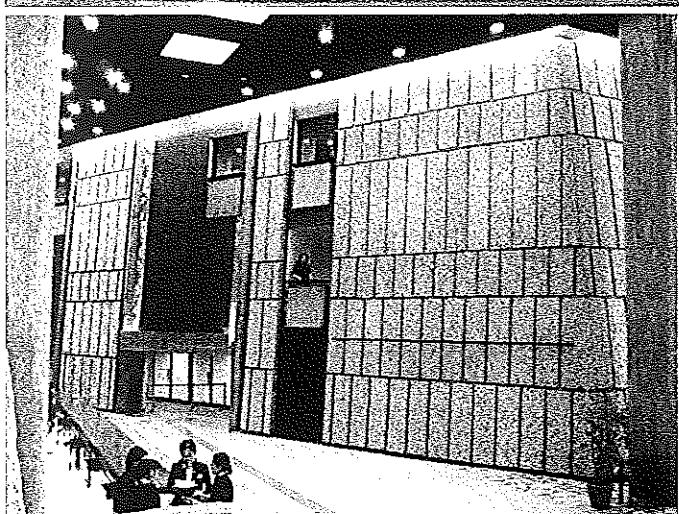
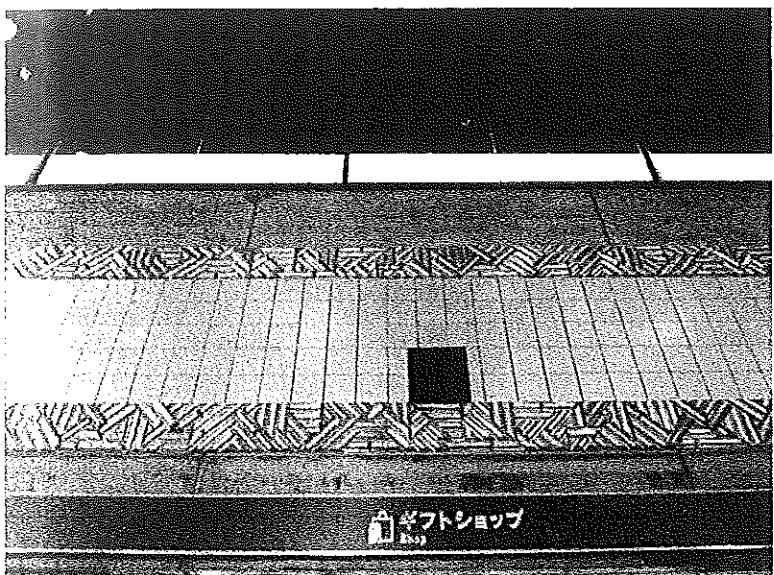
東京文化会館の中には、〇〇基調といったものではなく、多くの素材を使い、現代ではあまり見られなくなってしまった大胆な組み合わせをしていました。左の写真のように、赤色の部分が強いていて、おもしろいなあと思いました。この素材の組み合わせ方はある意味革新であり、これから建築にも取り入れていくべきだと感じました。

これは、真っ黒の天井に、電球を埋め込むようにして取り付け、星が輝く夜空のように見せようとしたものです。

この天井は、遠くから見ると、まんとうに電球の跡が見え、星が輝いているように見え、きれいでした。

しかし、この天井がずっとつづいているわけではなく、他の照明を使っている所もありました。その天井も全く違った雰囲気だったのですが、天井のデザインについても参考になりました。

これは、床です。一年間かけて手作業でつづいていくそうです。左の方に見える茶色い模様は、落ち葉をイメージしていて、これも、場所柄によつて違う模様がたり、色あいが違ったりと、どこを見ても飽きないようになっています。



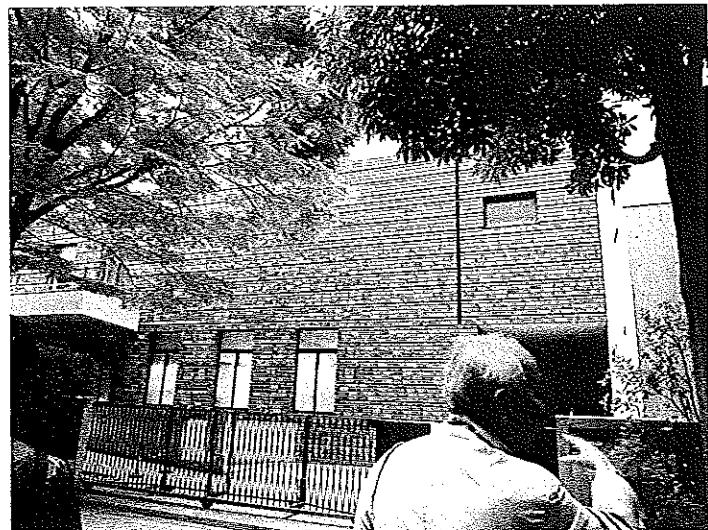
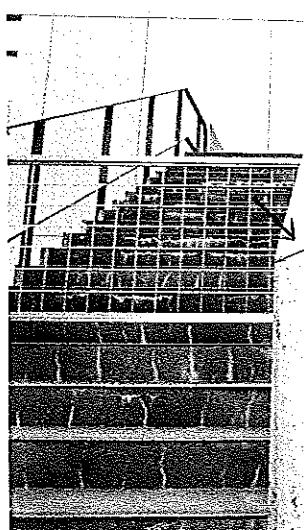
# 「国立西洋美術館」



memo

ル・フルビジエが基本設計をした唯一の国内作品である。1998年に建設者より「公共建築百選」に選定され、2007年には国の重文文化財に指定された。

{ 設計：ル・フルビジエ  
竣工：1959年



この手すりは、階段側面に斜めに付っています。これは雨が降った時、右の通路の方に雨が流れちゃないように、という意図で設計したそうです。

この建物は、ル・フルビジエの建設した「本館」に後から前川國男が付け足した「新館」です。このタイルは、自然の中に溶け込みようにこのような色にしたそうです。

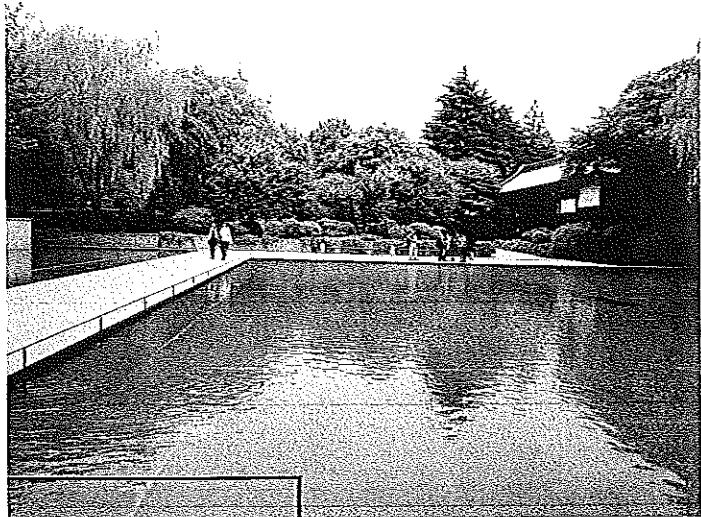
私は初めてこのような色のタイルを見ました。実際に見てみると、とても木曽の感じがしました。とてもかわいい色でした。

このように、建物には、私たちの気づかないところで、細かい気配りや工夫がされています。また建築について詳しく勉強したいなと鬼いました。私がこれから、デザインスタジオで建物をデザインする時には、そのデザインにいちいち理由があるように、内容の濃い建物を設計したいと思いまして。

# 『法隆寺宝物展』

設計：谷口吉生

竣工：1999年



memo

明治11年(1878)に奈良の法隆寺から皇室に献納され、戦後、国に移管された。7~8世紀の宝物を中心とした300件あまりを収蔵・展示している。

この建物は、2001年に日本建築学会賞を受賞している。

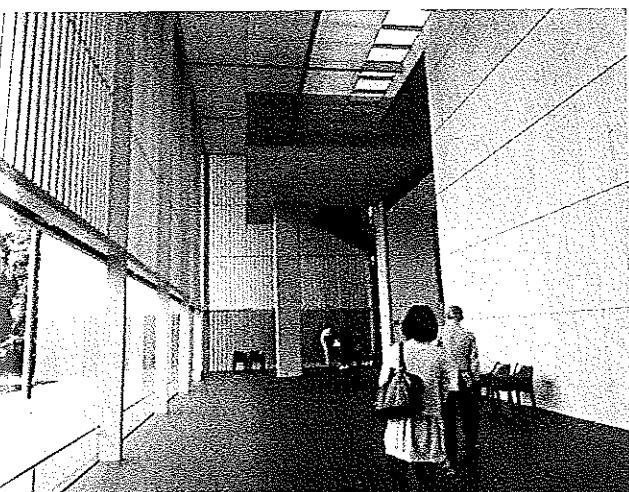


この建築物を見たとき、「きれい」という第一印象をうけました。直線しかないシンプルな建物だが、とても元気を感じました。

中は天井が高く、大きな窓があって、外を見渡せるようになっていたので、とても広々としていて、解放的でした。圧迫感ではなく、いつもどこに座って、ゆっくりしていいられるような、心地よい空間でした。

一方、法隆寺宝物を展示している内では、この写真の雰囲気とはガラッと変わった、幻想的な、少し不気味な空間がありました。

このギャラリーがまた、この建築物の大きな特徴かなのかも、とも思いました。



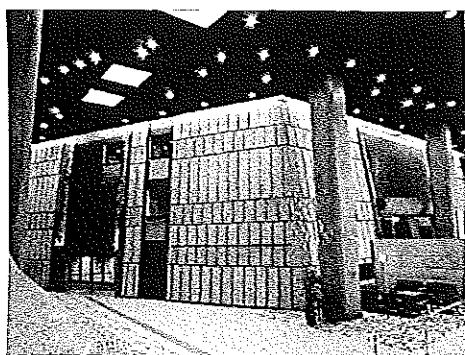
# 「建築ウォーカリー」

10N1109 木木 千絢 富永導入ゼミ

今回の建築ウォーカリーを通じて、建物のどういった所を見たら良いのか、たゞ散策して、素晴らしい、と見ているだけではなく、自分が建築的視点を持てて発見するということが大切だと思った。

下記は、ウォーカリーで回った建築物に対する感想・考察である。

## ① 東京文化会館



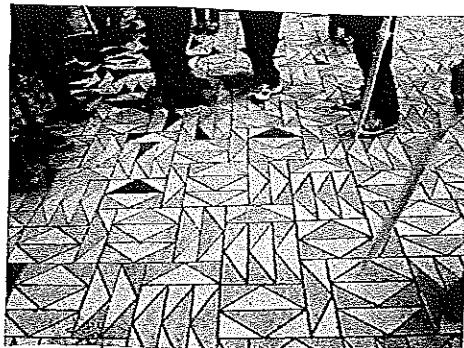
東京文化会館を外から見たことはあったけれど、じつは中を見たことがなかったので、建物の印象が変わった。外観はとても落ち着いた雰囲気を感じたが、中に入ると、壁面の金や赤、天井の黒、様々な色が目に映り、煌びやか印象を受けた。こんなに大胆な色使いであるのに、どうして違和感がない、非常にまとまっているかと不思議に思った。また、照明1つとっても、その配置が星空のように見えた。黒色の天井が夜空で、散らばっている照明が星々である。

照明の配置だけでも、建築物がとても美しく生きられるのだなと思った。また、床面の模様も面白かった。規則性がなく並んでいる三角の模様には何か意味はないのかと思っていたけれども、富永教諭がこの床は落ち葉をイメージして作られている。1年かけて、ここに床全面にタイルをはめ込んで作られたのだよ。と説明して下さった。その意味と手の甲に涙いなと感じた。

出入口まで伸びている落ち葉模様の床面は、外まで葉が舞っているように見える。

建築物やその装飾の意味を知ることは、自分が本当にその建築物を味わうということの大切だと思った。また、先生のおしゃるよに、

東京文化会館内のレストランでハヤシライスを食べ、ホールでコンサートやオペラを聴いてみたいと思う。



## ② 国立西洋美術館

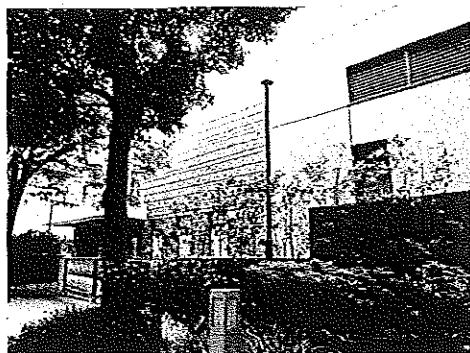
日本で唯一のル・コルビュジエ建築である。本館がコルビュジエによる設計で、新食館が前川國男設計。しかし、コルビュジエが彼の弟子である。前川國男、坂倉準三・吉阪隆正ら三人に実施設計、監理を任し、一度もこの美術館の完成を見ないことを今回のウォーカリーで初めて知り、驚いた。「いらっしゃす」とコルビュジエらしい「いらっしゃす」という乾燥の言葉を聞いて、確かに他のコルビュジエの作品と同じへとまとまりすぎてしまうような気がしたが、一度を見に来ないくらい気に入れない理由は何だったのだろうと思った。私なりに考えたが、上記の東京文化会館もそうであると思うが、大きいとはいって、公園の中に廻り場やコルビュジエの作品を設計することとか、スケール的に窮屈すぎたのではないかと思った。

しかし、やはり素晴らしい建築物であると覺った。

外にある階段の壁が、断面的に見ると、斜めに切り取らわれているようになっている。雨水が流れやすいようになってしまっており、建物を長持ちさせることができた。

大きな物づくりである建築にとって、建築物を長持ちさせることは非常に大切なことであると思うし、そのコルビジェの思想はとても尊敬する。

また、コルビジェの弟子である前川國男もこの発想を



色濃く受け継いでいたのだなと思った。彼が設計した新館は、コルビジェの本館を生きるように森の中にひっそりと建つてゐるイメージである。それが非常に美しく、森の緑との調和が“奇麗”であった。

この新館のベランダの手すりも、元からさしてあるような素材をあえて使い、雨が降っても大丈夫なように設計されてゐる。この発想は上で述べたように、建築物を長く持たせるという思想であると思った。

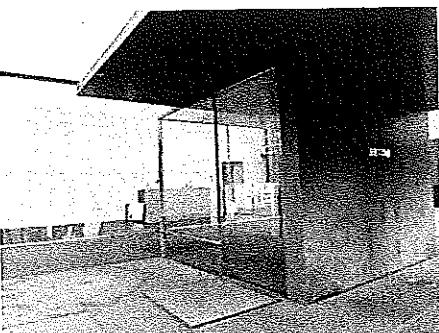
## 法隆寺宝物館

法隆寺の宝物館であるので日本風なイメージを持っていたが、近代的で正しく、

日本と西洋の融合であると見えた。最初見の印象としては、どこか繊細な宝物館といったイメージではやはりないということだった。繊細な印象をもたらすのは、この細い柱と、水辺の細い手すりであると思う。だが、この細い柱でもいいドアに見えますが、実際は宝物館の壁に耐震は全く

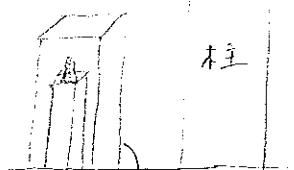
かかっていないらしい。また周りの水や噴水などにより、清廉な印象も受けた。このように、設計によってイメージを作り出すことができる

ということは素晴らしいと思った。また、正面からは、法隆寺宝物館の玄関は見えないようにしている。人がぞろぞろと出入りする所を見せないようにするという配慮をもったデザインも非常に勉強になったと思う。



館内では、菩薩の胸覽ができる部屋があったが、そこでの菩薩の保管方法も素晴らしいと思った。菩薩が置いられる台と周りを囲むシールドは、耐震的に分離している。中の台だけが床まであるように埋め込まれているのである。

またシールドと木との一律な開閉も奇麗だと思った。



今回のように街を散策することは好きなので、今回知った建築的視点をもとにこれからも探索を行いたいと思ふ。

柱

シールド

富永 ひさ

2011/10 平川 澄

法隆寺宝物殿は

いたるところに工夫がされていて面白かった。

まず、入り口付近を見る

入り口に行く前に池がある。

これは昔から神社などに見られる森のように心を清めるような役割があるらしい。

また、

池はコンクリートのような地面で人口的に作られているのにしっかり水流がある所であり

苔が生える事を防いだりするらしい

建物が日本の伝統的な建物なら苔は生えたほうが味があるかもしれないがやはりこのようなガラス張りの建物には苔のない澄んだ水が合うと思った。

今度は入り口に注目してみる

図1

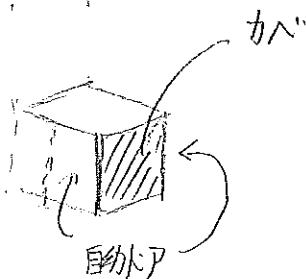


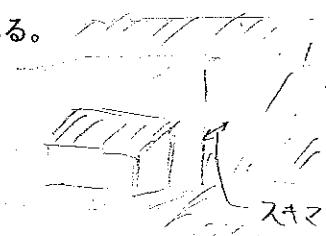
図1にあるように入り口は左右に分かれている。これは風防らしい

ここもしっかり考えてあると思った点である。

たぶん普通コンサート会場は開演時間があるので一気に素早く客を入れなくてはならないが、対して博物館は急いで客を入れる必要はない、対して博物館は急いで客を入れる必要はないので風防を優先してこんな形の入り口になったのである。

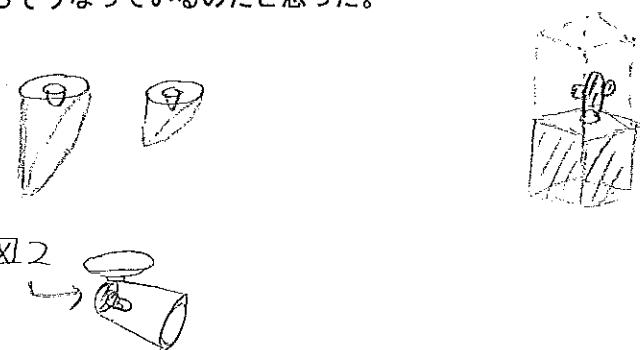
中にはいると、最上階の高さまで吹き抜けになったロビーが現れる。吹き抜けとガラス張りの壁から入る光によってすごく解放的な空間になっていて気持ちいい。そして、そんな解放的な空間と対照的な狭くて暗い、落ち着いた通路を通り展示場に入った。解放的なフロアによって少しつらんだ心が落ち着ついた。

そして、大きなガラスのケースが現れた。良く見るとケースと壁の間に隙間があり人が入って中身を交換したりできるようになっていてここでも工夫がみられる。



そして、次の部屋に入る。壁に沿ってガラスがあり 中央には長方形のガラスがいくつか置いてあった。そのなかには像がある。それぞれ独立したケースによって像をいろいろな方向から見られて面白い。

また、中央のガラスケースがある床は周りの床と独立していて地震が来ても周りの床は揺れるが中央の床は揺れない仕組みになっていて面白い。他の展示品と比べて、像は倒れやすく壊れやすいからそうなっているのだと思った。



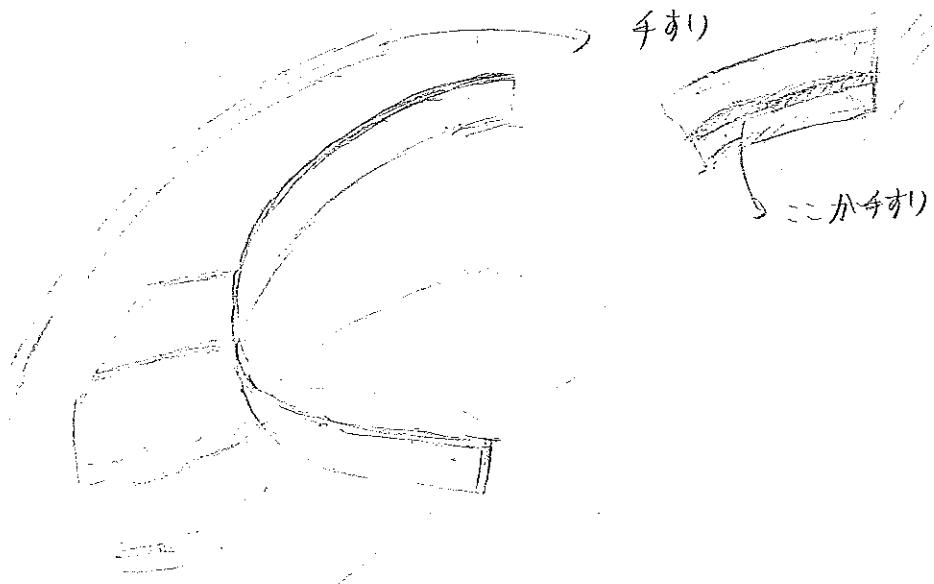
また、照明に注目すると 2 種類の照明があった。照明の光は斜めになっていたので電球自体が斜めになっているのかと思いまや電球自体は床に対して垂直に天井に埋め込まれていて電球の覆いが斜めにカットされているおかげで直接電球でライトアップするより広がりをもった優しい光を演出している。また、図 2 より安定していて地震の時も安心だろうと思った。

また、短く角度の緩い覆いで作品を照らし、長く急な角度の覆いで通路を照らす事でうまく作品を引き立てていると思った。

次に 2 階階にあがる階段に注目する。階段が緩やかな螺旋階段になっていてその螺旋の中心に大きな絵が置いてある。(図 3)

これは、この絵をまずは近くで見て次に階段を上りながら、すこし遠くからも見て欲しいという意図があるのかと想像してしまう。

また、この階段の外側の手すりは壁に埋め込まれていて邪魔にならならないようになって面白い。



2階に上ると図(全体的な平面図)のようになり、図Aの方のケースは上部が曇りガラスになっていて天井から直接ライトが当たられているので優しい光があたるようになっている。

また、図Bのケースはケケースの天井に横に長いライトがありその光を壁に反射させて優しい光を作っている。

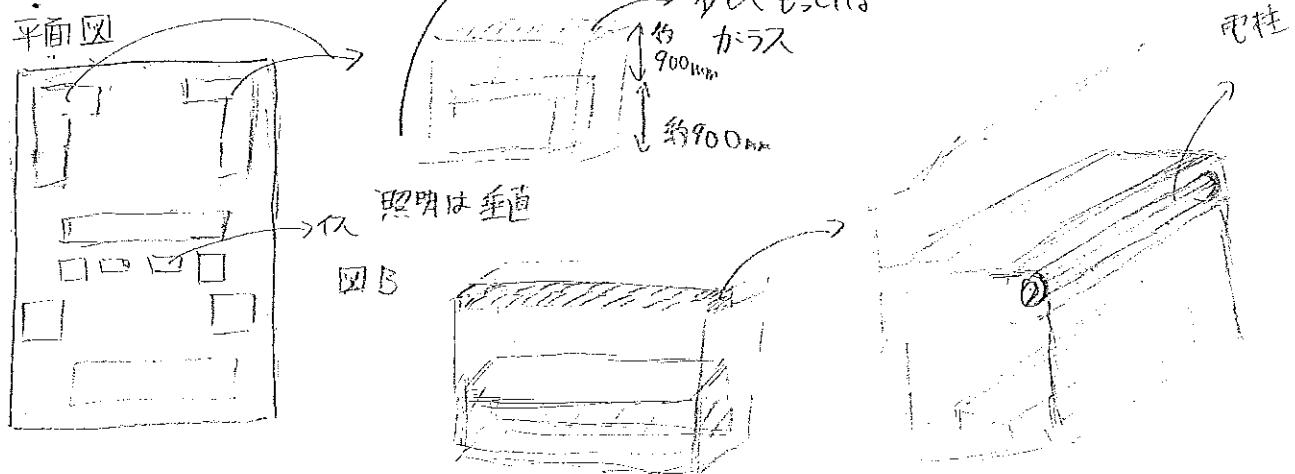
そして、ずっと続いた暗い空間を抜け明るい空間にでた。

そして中2階には休憩したり、この博物館にある作品を調べたりできる。また1階にはレストランがある。

この建物はすごい光の使い方が意識されていると思った。

入り口やレストランや中2階はガラス張りの壁や網目状のゆかや階段によって徹底的に明るい空間を作り上げている。それに対して、いったん作品がある部屋への狭い通路を通過すると作品を引き立てるためだけの最小限の光しかない暗い空間に一気にかわりまた狭い通路を通過と一気に明るい空間にでる事や個々の作品に合わせていろいろな光のあてかたをしている事などが理由である。

法隆寺宝物殿にのみ注目して書いたが、意識してみると建物にはそれぞれいろいろな工夫がされていて面白かった。



ウォークラリーを終えて

10n1111 藤井周

宿水モニ

### 東京文化会館

ウォークラリーの一番始めにこの建物を見た。

オペラ劇場の大ホールや小ホールを見ることはできなかったが、その周りの外観を見ることができた。大ホールは大きなコンクリートの柱で囲まれていてその外観はとてもダイナミックなものであった。

入り口の床には特殊な三角形で構成されている特殊な模様ができていて、このようなところにまで工夫を施してあることが面白いと思った。

### 国立西洋美術館

この建物は、ル・コルビジェが基本設計をしたものであるそうだが、実際に実施設計をしたのは直弟子の人であることを聞いた。国内唯一のコルビジェによって設計された建物であるから、その価値は計り知れないものなのだろうなと思った。

この建物は外壁が石で作られていて、特殊な建物である印象を与えられた。

この国立西洋美術館の外側につけられている階段の工夫がもっとも興味深かった。それは、この階段の手すりが斜めになっていることであった。コンクリートでできている手すりであるため、長い間水と触れ合っているとその水がコンクリートの内部にしみ込んでしまいもろくなってしまう。それを防ぐために手すりに傾斜をつけ水を早く下に流してしまうというものだった。デザインのことだけでなく、このような実用性までを追及した建築物を作るのはすごいことだと思った。

国立西洋美術館から法隆寺宝物殿に移動している途中、緑色の建物を見た。

緑色になっているのは、周りにある自然の緑色との調和をとるためであった。また、その建物には鉄製の手すりが着いた。

その手すりはすごく鋳びているように見えたがそれは鋳びることによって安定な状態になる鉄を使っているからであるようだった。

このような工夫もまた面白いと思った。

### 法隆寺宝物殿

この法隆寺宝物殿の外には、浅い、水をためる場所があった。これは、これからこの法隆寺宝物殿を見る前にその人の背筋をピンと伸ばすような、そういう意図があるものであるらしかった。建物の外にそういうものを作ることによってよりその建物の良さをわかってもらうようにする方法もあるのだなと思った。

また、この建物の入り口は二つに分かれていて、それは風の影響を受けないようにするためのものであった。この様な工夫もとてもすばらしいものだと思った。

宝物殿の中はとても神聖な雰囲気で、思わず息を呑んでしまうほどのものであった。

### 東京大学

東京大学の建物を見に行ったが、あまりじっくり見ることはなく、流してみていくようなものだった。ちょうどそのときに大学祭のようなものをやっていた。

もう少しじっくり見ることができればよかったですのだが、少し残念だった。とはいえ、やはりなにか伝統的な雰囲気を持っている建物だと思った。

このウォークラリーで、東京にあるいろいろな建物を見た。

まだまだすばらしい建築物はどこにでもたくさんあるのだろうから、これからはそういうたすばらしい建築物を実際に見に行って、その空気に肌で触れて勉強していきたいと思った。そしてその建物を見て実感していくことで、自分の中になにか、建築を学んでいく上で大切なものが育っていくのを期待して、これからがんばっていきたいと思った。

10n1111 藤井周

# 建築 ウォークラリー

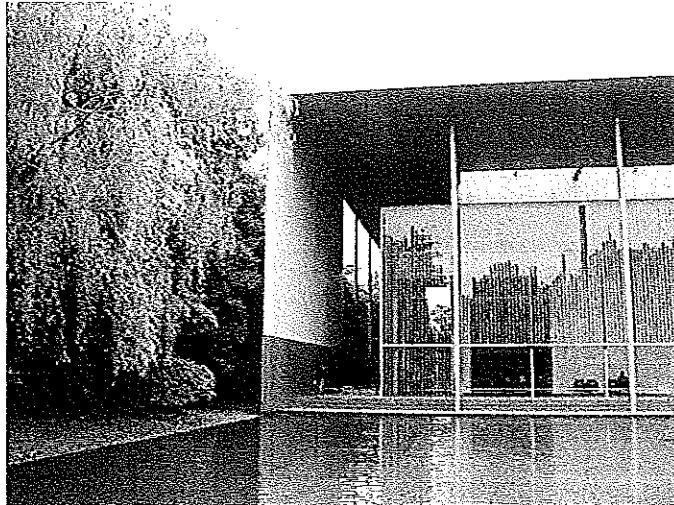
10N1112 藤口裕美

今回のウォークラリーでは、上野の東京文化会館から始まり、法隆寺宝物殿、東大など様々な建築を見て回った。自然との調和や、階段に雨樋がたまらないような工夫や、長く持続する建築など自分が分からなかつた視点を知ることができた。他にも「考える人」を見めたのが個人的に嬉しいかった。今回のビミで、疑問に思ったことは丸いデザインや角ばったデザインがどのように異なるか、印象を与えるのか?ということと、持続しつつデザイン性にこだわる建築をどのように作っていくか?ということである。これからデザインスタジオの授業や、様々な建築物を見る事によて追求していきたい。

## ・法隆寺宝物殿

宝物殿までの空間が非常に美しく、様々な雰囲気が消えるような感覚がした。

宝物殿の中身の国宝などの設置の仕方も引きこまゆるようなデザインがされていた。



す、きりした建物であまり好みのものではなかったけれど、これがうれしい。コルビジンの作品を見ていく上で勉強になった。富永教授はあまり良い建築でないと教えて下さったが、そういうことが分かるようになりたいと思う。

5/29 水 - クラリー ルート

lon 111.3 脇下 幸

主導設計：上野周記（東文化会館、圓山公園洋館（洋館宝物展））

東京大学、富永先生の設計事務所

チーナ式で、建物は

曲線が全くないと言ふ

と"のように、特有の形を示す

と"見え方が全く違うのに

と異った

中に入ると、天井には大きなアーチ型の柱があり、小柱が  
三列に並んで星空の様に取り付けられていて、ちょうど高貴な  
落着きがあると感想される。

床は、落着きとモチーフに考案された、タベの形。手のうがれ式

建物はすこし古め。

建物を見たが、設計者の

"の程度の建築家かわからま

(富永先生がおひこさんと  
言ふ)

西洋美術会館

設計者：田中正徳

建物自体を見たときは、コレで、  
設計者の"すこし建物なのでは"と思  
なからも、これが実は"すこしの建物"ではある  
だけれどもしかし、先生の説明を聞き、細か  
所に工夫が施されていると改めて  
感動した。例えば、雨が降った時に、雨水  
が外側に流れ込むように  
内側に流れ込むように  
外側から内側にかけ、急に  
斜面を作り、人間に引かれて傾斜する  
"すこしの建物"が作られて

去隆年宝物展 設計者：谷口吉生

2014.5.29

生物の外観は、一面がラス張りで、光が差し込む

の前には水が張りあり、川の前までおしゃべり

で人をいたわりせるようだ、また、臂筋"を伸ばさ

るような、そんな緊張感たたかわせす、

生物である。風が入り込まないようだ、

口が正面でなく横につけており、傘八木

の人物像があらわしものを正面から見ない

といいこと、工夫されており、いかにも"神聖な

生物"わかる。外見は光大して説明するのに

